

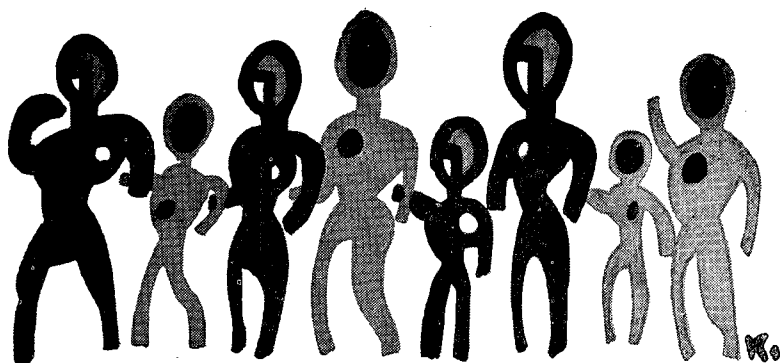
新 生

昭和五十四年六月二十日
昭
和
五
十
四
年
六
月
二
十
日
印
行



新
生
第
三
十
一
卷
第
二
号

財 団 法 人
東 北 新 生 園 慰 安 会



新生・第三十一卷第二号……目次

表紙 写真……南三陸金華山国定公園を望む……小川正志撮

巻頭 詩……季節の詩……久保瑛二……(1)

揚先生を迎えて……園長……横田篤三……(2)

故鈴木重雄氏を悼む……代議員会議長……佐々木三玉……(4)

長い 箸……福祉室事務補助……和田修光……(9)

詩……高橋たか子選……(11)

短歌……扇畑忠雄選……(14)

俳句……阿部みどり女選……(18)

川柳……後藤閑人選……(19)

春季文芸

随筆……秋山篤選……(21)

詩……高橋たか子選……(23)

短歌……扇畑忠雄選……(25)

俳句……阿部みどり女選……(26)

川柳……後藤閑人選……(27)

謝寄贈図書・園内日誌……(28)

編集後記……(湯村記)……(表3)

委 節 の 詩

緑りぼい風の中に

道標がある。

この道が

どこへゆくのか

ただそのことだけを思い。

あるときは

焰^{ほむら}をあげ

梳^{くしけ}する筋目の海を見つめながら

三十になったら

四十になったら

哀しみの深さを涙して

飾りのない日々を歩まねばと思う。

《久保》



揚先生を迎えて

園 長 横 田 篤 三

この一年間医師の補充のため一日として気の休まる日はなかったが、漸くこのたび揚秋冬先生をお迎えすることができて、一先づホッとしている。

先生は昭和十七年九月、日本大学医学部を卒業され、引き続き皮膚科教室において勉学の後、前橋医専の助教授に就任されたが、間もなく終戦となり、故国台湾へ帰国された。

その後は同地の公衆衛生署（保健所）で公衆衛生に携わるかたわら内科臨床の経験をつまれた。

昨年大阪市から招かれて来阪し、市立診療所の診療を担当されていたが、あまりにもめまぐるしい業務であったのもっと落着いた環境のもとで、じっくりと診察に当ることが出来る所を探していたところへ、当園の記事が載った医学雑誌を見て、はるばる大阪から下見分に来られたのであったが、幸いなことに諸条件が合致してとんとん拍子に事が運び、四月一日付で当園に着任ということになった。

大変温厚なお人柄で当園にとっては全くうってつけの医師が得られたことと喜んでいる次第である。

これから当園の内科を担当していただくことになるが、職員、入園者ともども温かくお

迎えし、長く勤務していただけるようよろしくお願いしたい。

次は副園長を招くことに全力をあげたい。

今年の日本らい学会総会は四月五日、六日東京で開かれた。昭和二年九月第一回が東京で開かれてから回を重ね、今回は第五十二回となった。

学会長は国立多摩研究所長の難波政士先生で、シンポジウム一題、一般演題三十一題。会場にあてられた自治労会館六階ホールは充分の広さがあり、プログラムに従ってスムーズに進行した。

一般演題は阪大微研、久留米大学細菌、広島大学細菌、京都大学皮特研、川崎医大生化学、日本医大病理、多摩研などの大学又は研究所の基礎部門からのものが多く、療養所関係では全生園、青松園、光明園から臨床的なもの数題が出されていたに過ぎなかったのは、ここ数年來の傾向ではあるが、療養所における臨床研究の実勢を示すものとして考えさせられた。

シンポジウムは「らいにおける組織障害」という題で、八人の方が演壇に立ったが、らいという病気の複雑さを臨床、電気生理、病理、免疫のそれぞれの立場から要点をかいつまんで報告された。このシンポジウムのねらいは臨床治療面に役立てようとすることで、特にこん度は免疫学の長足の進歩に応ずる免疫療法に、しっかりした足がかりができたように思われ、大きな期待をもちたい。

総じて今年の学会発表は天下の耳目をひきつけるように華々しいものではなく、地道な研究成果ではあったが、来年は広島市で松尾吉恭教授会長のもとで開かれることになった第五十三回総会へむけて、各研究者は意慾を燃やしながら散っていった。

故 鈴木重雄氏を悼む

代議員会議長

佐々木 三 玉

洗心院高松自節居士

去る二月五日、鈴木重雄氏の死をいぶかり乍ら、唐桑町に向う。午前十時より告別式を行うとの報せであつたが距離の關係から少し遅れ、読経が始まつていた。地福寺の外にも町民の多くが参加していて、鈴木氏との永遠の別れを惜んで居る姿は言い知れぬ悲しさが漂っている。私達もその中に混つて、黙想しながら、何故死んでしまったのか、彼を死まで追込まなければならぬ何かがあつたのかなどを想いめぐらしていたら、係の人が私達を見つけて、愛生園の人達（新生園を知らないらしい？）中に入つて下さいと、お寺の中に招じ入れてくれた。寺院内は多くの人で身動き出来ないほどである。私達は読経を続ける坊さん達の真後に坐らせられた。言わば正面である。幾らなんでも私達のような身分の者が坐る場所ではないが致し方ない。ずうずうしく見えたかも知れないが、頭を垂れ読経を聞き入る。だんだん背中が寒くなる、時がたつにつれ寒いどころではなく体が冷え込んでくるのである。あの日は快晴であるが、風の非常に冷めた日であつた、正面に坐つたのはよいが、入口の戸が開き放しであるので、多くの人数でも寺の中は温めきれなかつた。生前の鈴木氏になら、こんなに寒いところはかなわないから、場所を替えようなどと言いたのだが、この日ばかり、そんな気儘はゆるされない。じつと我慢しながら時を待つより仕方がなかつた。

読経が終り、洗心会の理事の人から弔辞が始まる。高松園の開園が四月と云う目前に控えて理事長は何故死んだと、悔しさを込めた声には参列者の中からすすり泣きが聞えてくる。ダイキン社長の弔辞、唐桑町長、一橋大同窓の友人、H氏病全国所長連盟を代表して新生園長横田先生と弔辞が続く、そして小学校同級生だつたお婆さんの弔辞、幼なじみの親しみが言葉の中に出てくる。重雄さんと呼

びかけるとき、一同のすすり泣きが一層加わった。その後、精薄児を守る会の婦人の言葉は、鈴木先生の御努力によって、哀れな子供達が身近で生活出来るようになり、このような子を持つ家庭に明るい希望を与えてくれる施設が、今出来上る時に何故死んでしまったの。私達を助ける為に働き続けた疲労が重なってしまい、こんなことになってしまったかも知れない。残された奥様は、私達が必ず守りますと、涙声にふるえ乍らのお別れの言葉には一同は声を出して感涙していた。最後にお別れの言葉として述べた若い男は、船員であつたらしく、両眼失明するかも知れない状態になり船を下り、人生の悲歎の中にあつたとき鈴木氏との出会があつた。鈴木氏は自分の長かった療養生活、発病当時の暗澹たる苦悶の人生から立ち上り、三十何年ぶりで社会復帰出来たいきさつを聞かされ、大いに励まされ奮起して眼の治療に専心する氣になった。その甲斐があり片目だけは失明から助り第二の人生に入ることが出来た。会社に入社する事も出来、結婚して子供まで出来た。この子が鈴木先生を意識するまでも元気で居てほしかった。先生はどんなに忙しくても私達の忘年会に出席され励げまして下さった。そして必らずノーエー節を唄ってくれた。その若者は大きな声を張りあげて泣き乍らその歌を唄った時には、地福寺の隅から隅までの人々も声を出して泣いてしまった。

鈴木氏は故郷に帰って、こんなにも町民から慕われ惜しまれて居つたのである。鈴木氏は療養所の中に在る時から、多くの療友の社会復帰の為に働き、故郷の為に、三陸海岸を国立公園にすべく努力し、国民宿舎としてからくわ荘建設に、町の水道設備に活躍し、近年になってから、町に洗心会を起し自ら理事長となつて、精薄児童の施設高松園の設置などに心身を投げうって働き続けていられた。その働きは郷土の為ばかりだつたらうか。それは自らライの偏見を打破して、私達にその勇氣と力強さを与えてくれた。そしてその豊かな識見と働きは地方民に、また国民に対して好影響を与えたのではないか。だからその死を惜しみ、内閣総理大臣、厚生、文部両大臣、国会議員の先生方、大学教授達、知事や県会議員、K K ダイキンの北海道から沖繩までの支店長達、療養所病院関係の先生達、長島愛生園の療友達は勿論、渡辺はま子さん始め文化関係の人々など、数えあげれば限りがない程の手電があり、供花があつた。これは鈴木氏の遺徳であらう。このように盛大な告別式は地方では見られないと思つた。

長時間にわたっての告別式は参列者の焼香と洗心会理事の御礼の挨拶で終り、私達は外に出た、すると愛生園より多くの療友達、それから社会復帰して働いているかつての療友達も遠くより参加しているのに出会い、熱いものがこみあげてくるのを覚えた。見覚えのある顔だかと思いつつ話合っていると、十五、六年前語り合った仲間であることが判り、お互い年をとり白髪になり頭髪が薄くなり皺が出てしまっていた。若い時の顔ばかり思い出そうとするからいけなかったかも知れない。こうした人々と別れを告げ帰りかけると、お寺に呼び戻された、何かかと思ったら、七日の法要をしたいから特別参加してくれとの事だった。町民は帰り私達と愛生園の療友、近親者が参加していた。午後二時近く、昼食を頂いたが、この時奥さんと挨拶することができて幸いであった。

私が鈴木氏とじっくり話し合い論じ合ったのが昭和三十七年である。この頃より親しくなった。それは全国療養所社会復帰研究会が発足し、第一回研究会が神山復生院の西山農園で開かれたのだった。会場は牛小舎でまだ使用されなかったもので、この場所が開かれたことは有意義であった。この研究会の指導に当たられたのは藤楓協会で、参加された療養所は、新生園、愛生園、恵楓園と復生院、それにオブザーバーとして駿河療養所の有志達が参加された。他に右の各事務長と厚生省、静岡県、静岡県のライ担当官が出席された。藤楓協会の理事長の浜野先生の挨拶に「結核は過去に於いて国民から非常に恐れられていたが、現代の医薬のおかげでこわい病気ではなくなった、これからはライについても、こわい病気でないようにするのが私達の義務である。国民の中には結核以上にライに対する強い偏見を持っているので、正しく理解して頂く為には苦勞を覚悟で当って貰わねばならない。皆さんの御協力をお願い致したい」とお言葉があり、復生院長のセンジャック先生は「キリストは馬小舎で生れ、皆さんは牛小舎で……」と言われた事が強く印象に残っている。この研究会は、六、七回で終わってしまったが、それは浜野先生が亡くなられたからである。

この会議を通して鈴木重雄氏の社会復帰が強くなり、偏見打破の決意が強くなったと思われる。加えてWHOの国際会議が東京で開催されたとき、曾ってライを病んだ印度のジャガデソンと云う大学教授、日本から鈴木重雄氏がライ部門に特別参加されたことがある。このようなことがあって鈴木氏の社会復帰を強固なものにしたと思われる。

鈴木氏のこうした中であつて活躍している時、唐桑町の青年会と婦人会より請われて、町長選挙に立候補したのであつた。私達は陣中御見舞の積りで応援に出かけていった。選挙事務所に着いて驚いてしまった。入口に「ライは必らずなおる」「ライを正しく理解しよう」といった具合の立看板が目に入つたのである。それは鈴木氏の偏見打破の実行であり、正しく理解した町民の受け入れ態勢であつた。私達は激励の挨拶をして帰ろうとしたのであるが、切角来たのであるから応援演説をしてくれと云うのである。私は準備をしてないし、こういう事をやることがないからとことわたのである。しかも前キリスト教国際大学総長であつた湯浅八郎先生と他に阪大工字部の先生が話された後である。そんなこんなしているうちに、司会者が、新生園の入園者である私を紹介してしまつたのである。止むなくマイクを手にした私は、とっさに石川啄木の歌が浮んできたのであつた。そこで私は「石川啄木の歌に、石をもて追はるる如く古里を出てし悲しみ今に忘れず」とありますが、皆さんも啄木の心境は判ると思います。鈴木氏は来春、一橋大学を卒業出来るといふ時、ライという病気に罹られたのです。当時のライに対する人々の偏見は比較にならない程のきびしさがあつたのです。そういうことから鈴木氏は、学業を捨て青春を捨て、又濃い血でつながれる肉親達を捨てて島の療養所に身をかくしたのであります。その悩みはその悲しみは、又人生のくやしさは啄木の歌どころではなかつたのです。こうして三十有余年療養を続けて来たのであります、啄木は、また次のような短歌を詠みました。『新しき明日の来るを信ずといふ自分の言葉に嘘は無けれど』又、『新しきからだを欲しと思ひけり手術の傷の痕を撫でつつ』と、これは若くして肺を病む啄木の心境がにじみ出ていると思います。鈴木氏の心境はどうであつたでしょう。じつと我慢して三十余年療養を続けたのです。そして時代は鈴木氏を見捨ててはおきませんでした。ダイヤンという会社は鈴木氏の有能を発見したのです。そして鈴木氏は北海道から沖繩まで会社のために働き、郷土の為に働き、社会復帰のために努力したのです。こうして鈴木氏は皆さんに温かく迎えられ町長に立候補されたのです。鈴木氏は見聞してきた日本国中の良さをこの町に活かそうとしております。又長年に亘つて経験して来た人生の意義をこの町に造りたいと願つております。それは老人には生き甲斐を、青年には希望を、そして病弱な

人には自分の体験を活かした幸せを、病院や医者のお任せ下さい。この町を豊に幸福にするのはこの人以外には無いと断言できます。皆さまの為に町の発展の為に鈴木氏をお願い致します。」というような事を上げたのでした。しかし、開票の結果僅少の差で破れてしまったことは残念でならなかった

今、このように考えていることは、成功であったと思う。昔からこりかたまっているライの偏見を打破した勇敢さが実ったからである。私は東北農場を造り、社会との交流を図り、ライに対する偏見を少しでもやわらげ、社会のために役立てようとしたが、余病を得て身動き出来なくなり、途中でひとりで隠退してしまい療養することになってしまったが、鈴木氏の成功は全国療友に希望の灯を与えた事である。高松宮様は、町長と云う仕事は健康をそこねるから、無理をしないように町民の為に働いてほしいとの事であった。そこで鈴木氏は不幸な子供達の施設を造り、その為に余生を送ることにし、町の有力者と計り、洗心会を起し、この計画を町議会に於いて議決して頂いたのであった。工事に着工しこの四月に開園を予定し、高松宮様をお迎えして盛大に開園式を挙げるべく、園長などその他の職員を決定し、その日を待つばかりであった。

人の生命は泥棒に会うようだと言われるが何時どんな時、死が来るか判らない、鈴木氏は去る一月三十一日突然生命をうばわれてしまった。私はその死を納得出来ない。しかし社会復帰されたと言っても、鈴木氏は身体の不自由者である。身体障害者が働き続けるとき、精もこんも疲れ果てたのではなかったろうか、疲労過剰であったに違いない。それを見た神様は鈴木氏を嘉し永遠の休息を与えられたのかも知れない。鈴木氏を助けて働き続けられた奥様も並大抵な苦勞ではなかったと思う。真実に御苦勞様でした。今後は亡き主人が守って下さることを信じ、鈴木重雄氏の御冥福を心からお祈り致しペンをおくことにする。

(昭和五四年二月二十一日記)



長い箸

福祉室事務補助 和田修光

最近ちよつと感じた事を記して見たいと思います。皆様方はよく地獄・極楽という言葉をお使いになるようですが、この地獄・極楽という言葉は私共一年の内何回使っているでしょうか、或は一ヶ月に何回位使っているか、また今日、朝から今までの内にもう使った方があるかも知れません。

たとえばどういう時に地獄・極楽という言葉を使うかというと、真冬に外から帰って来ると本当に寒かった。まるで地獄のような寒さだった。或は真夏の暑い日に太陽に照らされ続けて帰って来た時、また木陰に入ってまるで地獄のような暑さだった。こういう表現をいたします。もっと悪い言葉を使うと、あのヤロー地獄に落ちてしまえ、とよく使う言葉であります。それからまた極楽という言葉は一日の仕事が終って、お風呂に入って汗でも流して、晩御飯のテーブルについて熱燗の一本や二本つけてもらって、ああ——極楽々々とい

う言葉を使います。ところがそれほど我々が使い慣れている地獄・極楽という言葉ですけれども、我々は地獄・極楽というものの存在を認められるでしょうか、地獄・極楽という言葉がああ確かにあるんだとお思になる方がいらつしやいますでしょうか、ないと思っていらつしやる方が多いでしょう。けれども実際のところは地獄・極楽というのはたしかにあるんです。そんな馬鹿などおっしゃるかも知れませんが確かにあるんだそうです。

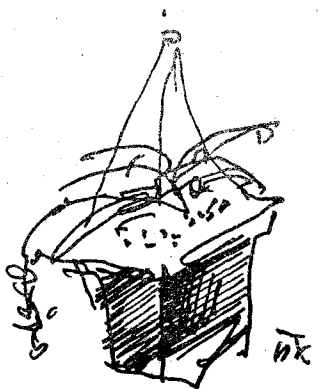
それではどこにあるのか、さてどこにあるかというのは後記にいたしました、地獄・極楽というのは極端な例に使用すけれども、どれ位の差があるかということで皆様方の中には、昔、小さい頃にでもお寺参りいたしますと、お彼岸とか、そういう時に地獄・極楽の絵という掛け軸がよくかかっていた。そういうものをご覧になった方もいらつしやると思います。私共も小さい頃は悪い事をしますと、こうやって閻魔さまに舌をぬかれるんだとか、針の山、或は血の池地獄というように、まるで別府温泉さながらみたいにそういう絵が掛かっていました。そして、その地獄に住んでいる人間というのは頬は痩せかけて、目は血走って、見るもおそろしい姿をしていたものです。子供ごろにその恐しさというものを感じた訳であります、その反対に極楽の絵を見ますと、皆んなふくよかな顔をしまして雲の上に住んでいて、なんの苦勞もないような極楽蜻蛉という言葉がございますがその通

りでございます。ところが絵に書いてある地獄・極楽はそれ位の差があるようですが、実際の地獄・極楽は、地獄・極楽に行つて来た人の話を聞いた訳ではありませんが、ものの本に依りますとそれ程の差はないようです。たとえば、人間が住むのにまずフトンというのは大事なのですが、フトンもし我々の従来の考えでいきますと、極楽のフトンというのはマットレスが、そして絹の夜具が又厚くて、寝たら身体がうまつてしまうのではないか、そんな立派なフトンに寝ていて、地獄の人々は針のムシロにでも寝ているのかとこういう気がしますがそうではないんだそうです。極楽だからといってそんなフカフカでもなく、地獄だからといってそんなベツシャンコでもないそうです。どちらもまあ程々の世間並みなフトンに寝ているんだそうです。それから食べる方はどうかと申しますと、地獄・極楽も我々が日常生活で食べているみたいな、ごく当り前のものが地獄・極楽にもあるんだそうです。ところがこの同じものを食べるんですが食べ方が違うんだそうです。長いテーブルがありまして、そのテーブルにどちらも向い合せて食べるそうですが、一寸違うのは、我々の使います御飯を食べる時の箸はだいたい二十七センチ位のものを使つておりますが、地獄も極楽も箸がものすごく長いんだそうです。そこで地獄の人はこの箸でもって食べ物をつかみます。つかむ時には仲々手の長さで箸の長さがありますの

で、やつとつかんだ食べ物を自分の口にもつていこうとする間に途中で落したりで、自分の口に入らないんだそうです。それで目が血走つていつも飢えを感じていなければならぬ。ところが極楽の人はどうかというと、向い側に座っている人に箸でつかんで相手の口に入れてやり、また、向い側にいる人はその反対にいる人に入れてあげるんだそうです。ですから自分がまず食べるより先に向い側の人の口に入れてやる。それなら少々長い箸でもまあどうにか相手の口に入れてやる事が出来ます。ですから極楽の人はいつも目の血走つたような顔をしないですむ訳です。地獄と極楽、極端に使用しておりますがその差といへばたったこれだけの事です。自分が食べるよりまず向側の人の口に入れてやる。これでお互に飢えていない極楽と、人に取られてなるものかと自分の口に、その長い箸で食べようとして食べることが出来なくて飢え苦しんでいる地獄の人。

さて地獄・極楽はどこにあるだろうかといいましたが、そういう地獄・極楽ならどうもこの世の中にあるようです。よく我利我利亡者といいますが、我は「われ」利は「利益の利」ですから自分の利、自分の利と自分の事ばかりしか考へない利己主義的な人、これを我利我利亡者という訳です。すくなくとも、この亡者の住む地獄の生活からはぬけ出したいものです。

詩



高橋 たか子 選

◇ 入 選 ◇

白 鳥 江 崎 深 雪

風花をまじえた

横なぐりの風にさらされながら

恋に恋来し

伊豆沼の岸辺に

私は降り立った

広々とした

西の入江に浮ぶ

美しい白鳥の群れ

小さな群

大きな群

その中に

首をうしろに廻し

仲よく

眠りこんでいる数羽の鳥

岸の近くに

パン屑をなげこめば

スイスイと泳ぎながら

飲みこむ

その

可愛い嘴

白い波がしらが

岸に打ちつけては

引いてゆく

眩しい程に

光りを返す

一色の水の面

はるか向うに

滑走しながら

水しぶきを上げ

飛び立った

四、五羽の白鳥が

蒼く冷えきった空に

吸わるる如く

消えていった

平和な水鳥の楽園よ

遠い北国に旅立つ

その日まで

一羽も

失われることがないようにと

私は祈り

かじかむ手で

いつまでも

いつまでも

パン屑を

撒きつつけていた

◇ 佳作一位 ◇

朝やけ夕やけ

斎藤照雄

時折

東の空に……西の空に……

姿をみせる

神神しく

眩い

迫力ある
あの現象

あれは

なんなのでしょう

なんでしょう

僕は

何時も

あの現象と逢う度毎に

心を動かされ

不思議に

疑問に

思うのです

今日も

僕は

あの

すばらしく

美しい

現象に逢った

◇ 佳作二位 ◇

春

斎藤照雄

長く……長い……

トンネルを抜け出た

そこに

北風を耐え抜いたものたちが

明るい陽差しを浴びながら

満面に微笑を浮べ

辛く

苦しい

生活がなかったかのように

太鼓を叩き

笛を吹き

鐘を鳴らし

うたをうたい

踊り

勝利の美酒に

昼夜の別なく

酔いしれている

短歌



扇畑忠雄選

早春の丘

園の上をめぐる白鳥の声過ぎて空冴ゆるらし目ざめ居る時

【評】目がさめて聞いた白鳥の声、その過ぎていく声で冬の朝空の冴えを感じたのは鋭い。

洗面所の窓を開くればヒヨドリの声冴えわたる今朝のしばれに

舗装路をさぐる杖には覚えねど足に覚ゆるかすかなる雪

早春の風なき丘に杖止むれば夢の中なる吾がとまどう

わが杖の音を待つらし拾て猫の声聞こえ来る碑の丘の道

二月の風

さがけて冬を越ししかうす紫の光り眼をひくイヌノフグリの花

伊豆沼は風寒からし白鳥を尋ぬる友とバス停に向う

溢れ入る窓の冬日にカーテンを引きて病む日々聖書読みつく

【評】ゆたかな冬の日ざしだが、それをカーテンで遮って聖書を読むところに病者の姿が出ている。

桑畑に雪ふりしきて国の旗ひるがえる二月の風に耳立つ

齒の痛く俯向きて戻る門口の土にへばりてナズナ青める

古谷

(入選二位)

巖

松崎つ

ね

(入選二位)

(佳作十位)

雪 解 け て

小 泉 た き

療園に飼われぬ猫と知りつつも心決まらず幾日か過ぐ
腹一杯食いてゆけよと猫に言う吾の言葉にわが涙して
ひとときの安らぎ覚ゆ雪の日をこもる厨に豆煮ゆる音

(入選三位)

【評】雪の日を部屋にこもるのは安らぎであるが、その上豆の煮える音を聞きながらこもるといふ所に特殊性がある。

ふつつと豆煮ゆる音安けくて何にこだわる日々かと思ふ
屋根の雪解けて雫する音聞けり淡々としてひと日暮れつつ

(佳作七位)

う つ そ み

板 垣 和 香 子

口元を整形されつつ思いおり千変萬化のわがうつそみを
病室の庭に出ずれば西空にはの白く見ゆ有明の月
締めよく整形されし口元を映し見ながらクリームを塗る
この年は心静かに保ちたし松吹く風を世の常として
療院に住む佗しさもうすらぎてさやかに聞こゆ松風の音

(入選四位)

【評】療院に長く住んでいる佗しさは社会の人々には分らないだろう。下の句の松風を聞いている所に諦観が感じられる。

入 江 の 白 鳥

江 崎 深 雪

吹きつけて風の冷たき沿岸に凍み通りつつ白鳥を見る
岸近く白鳥あそぶ水皺の上に撒きたり菓子パン幾つ

白鳥の群れにまじれる鴨幾羽雪となる日の入江に浮ぶ

(入選五位)

【評】伊豆沼の白鳥や鴨の歌は多く作られているが、その場が「雪となる日の入江」というのはよい把握である。

鍋物にせんと囲いし葱なれど寒のさ中に尽きてしまいぬ

庭土の温み恋いつつ降りたてば黄の色淡く水仙萌えぬ

(佳作八位)

伊豆沼にて

新田隆志

補導婦に伴われつつ盲吾も白鳥見学のバスに乗りたり

白鳥をつつむがに鴨ら泳ぐとう伊豆沼のほとり杖に歩めり

(佳作一位)

白鳥見学に冷えたる体温めんと熱きうどんを音立てて食う

らい者吾らと交わりたしと柔和なる福祉女子大生教会へ来ぬ

雪の道

今野新子

裏付きの長靴はきて雪の道友と連れだち礼拝に行く

暖かきこの朝なれば久々に靄にしめれる窓ガラス拭く

(佳作二位)

隣室の掃除機の音聞きながら吾ははたきと箒持ちおり

幼なくて野芹をつみし故里を偲びつつ食む芹の味噌汁

きさらぎ

北海薫風

盆梅の剪定終えて植え替えの作業に入りぬ如月の午後
風つよき夜に看護婦は各部屋の廊をめぐりて安否たしかむ

癩という重き荷を負い三十余年この体験を人は知るまじ
運命のさだめと癩に堪えて来しわが生涯に悔ゆるものなし

(佳作三位)

誕生日

佐藤政己

北風にはこばれて来し雪にして一夜明くれば清くつもりぬ
久々に来し親友の便りなり孫の産まれしよろこび書きて
やわらかき春の陽差しに蠅一つ冬を越し来て吾にまつわる
友も老い吾も老いたる山療に酒酌みかわし誕生日祝う

(佳作四位)

朝の光

佐藤つや子

やわらかに萎えし体を包むごと朝日差し来ぬ年の始めの
流し台のふちに手をつき腰のぼし痛みに耐えつつ亡き祖母おもう
膝に手をつきて幾度も腰のぼしけさの洗濯ようやく終わる
日の延びしことを知りたり庭の面を流るる空気かるがるとして
百合とバラの造花買い来てテレビの上探りつつ置く向きをたしかめて

(佳作五位)

ふるさと

岡田優子

病みつぎて夢を見ておりふる里の雪に埋もるる古きわが家
新築をせしと聞けども印象に残るは元のふるさとの家
氏神を建ててお祭りせしという受話機にはづむ弟の声
手を取りて遊びてくれる友の顔ひと目見たいと常に思いき

(佳作六位)

俳句

阿部 みどり女選

◇ 入 選 ◇

園 永泊

地ならしの土の匂いを運ぶ東風

【評】地ならしをしている様子が見えている。その土の匂いが届いたのである。その匂いは折から吹いている東風によって運ばれてくるようだ。と感じたのである。

園 永泊

庭めぐる杖の先ざき春を待つ

【評】庭をめぐることができる程に快方に向われたのであらう。しかし杖は必要なのである。杖の先々に見える草や木が、如何にも春を待つようだと感じて、できた句である。自然との出会いが如何に俳句では大切かを思わせる句である。

小林 春美

酒煙草絶ちし療養日脚伸ぶ

【評】好きな酒をやめ、意志が強くないとやめられない煙草

までも絶って療養につとめる。容易なことではないが、それを成し遂げたところに喜びがあるわけで、その喜びの心が、日脚伸ぶという季語によって、よく出された。

園 永泊

笑みそえて眉蘇を酌み合う療者かな
弱りたる齒にしみとうる寒の水
書き初めや膝に光りと書く盲
窓あけて東風に片頬触れにけり

(佳作)

小林 春美

顔ぶれの変わらぬ茶室初こよみ
軍鶏鳴けば矮鶏が応える今朝の春
聖書聞く刻定まりぬ冬籠

(佳作)

北海 薫風

春嵐標札を吹き飛ばしけり
如月や乾きそめたる砂利のみち
春立つや舗道を軽く車椅子
退室の近づく窓や桜草

(佳作)

佐藤 花紅

道の辺に目のつき易く落の苔
春めくや友に誘はれ外に出でし
定年の人の去り行き草萌ゆる

(佳作)

川 柳



後 藤 閑 人 選

◇ 入 選 ◇

桃 生 小富士

春の使者引き受けました牡丹雪

【評】北国はかくて太陽も明るくなってゆく。

築 場 市 三

休ませた白杖握り小正月

【評】希望明るい日々の始まりである。

桜 山 南 仙

雨垂アメダレと囁き合った不眠症

【評】こしかたゆくすえの思いは尽きない。

桃 生 小富士

腰の冷え遠のき牡丹雪となり
面白く面白く消ゆ牡丹雪
太陽と仲よしこよし風邪ひかず
学あれど役に立たないもやしっ子

築場市三

お早ようを交し平和な寮である
闘病に勝った此の手に無菌証
(佳作)

小野寺 静雄

一、二、三、言葉をかけて床をしき
茶柱を耳打ちされて笑顔する
電話口母の声聞くうれしい日
早春の風がからまる白杖に

(佳作)

桜山南仙

寒波つづき氷柱がなにも喋らない
夜が明けて氷柱一言づつ喋り
伸び縮みしながら氷柱に春近し

(佳作)

上野 咲子

佐藤花紅

こつこつと振子の音と俺の脈
(佳作)

心眼を開いて 一步 白い杖
元気かい見舞に友が来てくれる
カナ書きの便りと聞きぬ母の文字
赤飯を隣りに分ける誕生日

北海 薫風

老骨に川柳がある 楽しき日
眼底にふる里がある 回復期
全快の夢をベッ トに綴る手記

斎藤 照雄

息止めて生命に一寸抵抗し
云う程に実行力のない政治

物足りて捨てることのみ子は覚え
憂さと愚痴捨場にされた日記帳
療養所孤独に慣れて生きるとこ
心臓の鼓動 大事に薬呑む

随筆



秋山 篤選

◇ 佳 作 ◇

暖かい冬

江崎 深雪

今日も素晴らしい上天気、例年ならば二月は寒さが一番きびしく、そして積雪も多いのだが、今年は暖冬で足の弱い私には大助かりな年である。日溜まりの土手にはイヌノフグリが他の花にさきがけて可愛らしい紫の花をつけている。そのそばに早やツクシの坊やが一本、枯れ草を押しつけるようにして固い頭を見せている。ああ暖かい冬だなア……と私はひとりつぶやきながら、曲がりかけた腰を伸ばし、碧く澄んだ空を見上げた。このよい日和にさそわれて、私は洗濯を思い立った。湯を沸かし、さて洗い始めると次から次へと洗いたくなり、予定しないものまで手をつけてしまう。私は母から習ったやり方を馬鹿の一つ覚えのように今も守っていて、一つ一つ手もみして洗う。軽く脱水機でしぼったものを一枚一枚たたんで、ポンポンと、二つ三つたたいて干せば皺が伸び、アイロンをかけなくてもすむのである。友達に洗濯機の方が楽ではないかと言うのだが、一つには運動の為にものなるのでこの手が続く限り私は手洗いすることに決めており、また手洗いするのは楽しみでもある。竿にずらりと干した洗濯

物が光りに映えて白一色が眩しいほどである。

縁側に腰を下ろして眺めていると、ハルさんがやって来た。暖かいから納骨堂まで散歩しようと言う。納骨堂へは暫く御無沙汰していたし、それに、友の命日も近づいたので、丁度よい機会だと思ひ早速、補装具の紐を締めなおし出かける事にした。路は砂ぼこりが立つ程に乾ききっていたが、久し振りで登った裏山は松の緑が眼にしみ美しい。新鮮な空気を胸一杯吸い、樹の間の陽光を肌に感じながら、私達は一步、一步急な坂を登った。

二人は故人の為にロザリオを繰り、私が先唱してメダシ聖寵充ち満てるマリア、を唱え始めた。あたりは静まり返って祈りの声のみが高く低く……やがて祈り終え様とする時、不意に啼き出した山鳩の声に二人はびっくりした。そのとき私は気がついた。昨年の秋頃は小鳥の声で賑やかであったこのあたりが、今日はさっぱり声もしないし姿も見えない。敏感な小鳥達は暖かい冬と言っても季節のうつろいを知って渡って行ってしまったのだろうか。

二人は日溜まりに腰を下ろし、今年は暖冬でこのまま終るのかしらなどと語りながら向うを見ると、日を浴びた枯れ草の中に一叢の淡いみどり色が目についた。そばに近づいて見

ると、もち草である。まだ摘むには早いが伸びた部分を少し摘んでその匂いを嗅いだ。何とも言えないその香り、私は「春の香りね」と言つてハルさんの手に渡した。それは同時に故里の香りでもあった。「これで蓬餅でも作ったらおいしいだろうね」と言いながら、私は春風に髪を吹かれながら籠を下げ一緒に摘み草をした故里の秋ちゃんを思い出していた。今どうしているだろうか、よいおばあさんになっているだろうか、遠い日の想い出が私の胸をしめつける。ハルさんもやはり故里の想い出に、ふけているのだろうか、暫くのあいだ二人は無言でいた。ふとハルさんの顔を見ると涙が光っていた。私は、ハルさんをいたわる思いで一蓬餅つて、よいものだね」と言った。あの明るい草色の団子、母の手造りの匂の味、どうして忘れることが出来よう。さあ帰ろうかとハルさんが促したので、心を後に残して二人は山を下った。今日は、故人の為に祈り、私も少し疲れたがよい運動になったと思い乍ら部屋へ戻った。そして乾いた洗濯物を取りだみたたんでいると、こころよい洗剤の香りが私に安らぎをあたえてくれる。今日を生かされていることの有難さと思う。夕方ラジオのスイッチを入れると今日の気温は四月末頃の暖かさと告げていた。

詩



高橋 たか子 選

◆ 入 選 ◆

浜の思い出

江崎 深雪

行きずりの

浜に

唄がひとり若布を干していた

海風は頬に冷たかったが

手拭をきりつと被った顔に

深い皺が見え

潮風に

さらされた日焼けの顔と

節くれだった

大きな手が

浜のきつい労働を

もの語っているようだった

私は

ためらいながら

唄に言葉をかけた

少しこの若布を分けて下さいと

唄は

「あんたどこから来なされた」と聞く

私は
ただ笑って返事を返した
媼は

「採れたばかりの新鮮な若布で
酢に合えても

汁に浮かべても
うまいよ」と言った

海の香りが清々しく匂う

その若布を抱え込んで
春の陽ざしの中に

光る砂浜を私は歩いていった

【評】 浜辺、手拭をかぶった媼、そして海の香りの清々しい
若布と、一幅の絵のような、さわやかな感じの詩で
す。

◆ 佳作一位 ◆

春の小川

斎藤 照雄

かたくなに心を閉じて
重く暗かった生活より
解放され

大海原への旅を始めた流れよ

明るい陽差しの中を
満面に微笑を浮かべ
苦しかった事も

哀しかった事も

なかったかのようにな

すがすがしい顔で

そこはかとなりく

春を迎えて

サラサラと……サラサラと……

【評】 春の小川に託した心境がさらりと描かれています。

◆ 佳作二位 ◆

「みつけた一日」

園

永泊

黄昏る丘に来て

我が儘な悩みを捨てて来た

去年の秋だった

捨てて来た悩みが

色とりどりの野花となった

また蝶となり小鳥となって私と巡り合った

そんな春の一日をみつけて丘の上に歩みを返す

【評】 まだ書き足りないところがありますが、詩の心を
持っているところを取りました。

短歌

扇畑忠雄選

◆入選一位◆

小泉 たき

雨やみてわが靴音のしめる道

樹の芽匂えりあたり包みて

【評】雨後のうるおった空気の中だから、樹の芽の匂いもしるく感じられる。情景とともに新鮮な感覚が出ている。

◆入選二位◆

江崎 深雪

日のぬくみ恋いつつよもぎ摘みおれば

沁みて想えり故里の山

【評】ヨモギ摘みで故里を思う情はなつかしく、感動的であろう。「日のぬくみ恋いつつ」の句が、そうした情緒を生かしている。

◆入選三位◆

佐藤 つや子

手の萎えし人のみ多き宴会に

手拍子うつ音まぢまぢにして

【評】これは療養者の切実な姿で、第一、二句と第四、五

句がよく照応して、一つの人生を表現している。

◆佳作一位◆

松崎 つね

文机の片隅に置く一輪挿し

ラッパ水仙に部屋明るみぬ

◆佳作二位◆

今野 新子

その声に友の面影しのびおり

永き年月盲いておれば

◆佳作三位◆

板垣 和香子

たそがれの道をそぞろに歩みつつ

ふと返り見るタンポポの花

◆佳作四位◆

古谷 巖

沼の辺の盲導柵を杖に打てど

ものおじもせぬかいつぶりの声

◆佳作五位◆

北海 薫風

白杖につけたる鈴の音聞き分けて

誰れ彼れを知る盲人の聴覚

◆佳作六位◆

佐藤 政己

試歩のびし東屋への路草萌えて

清しき空気しばし吸い居り

◆佳作七位◆

新田 隆志

任果たし心足りつつ立つ庭に

雨後の垣檜葉清しく匂う

俳句 阿部 みどり女選

◇ 入 選 ◇

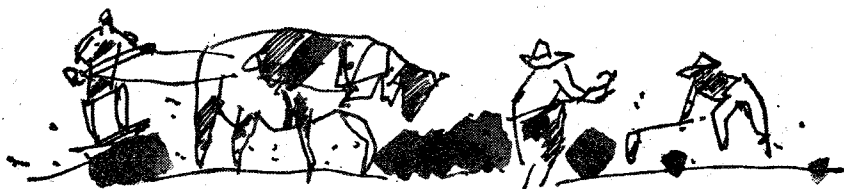
初蝶のとび立ちしあと水あかり
車椅子花のトンネルめぐり来し
暖かな湯の香木の香やこけし町

園 永 泊
佐 藤 花 紅
鈴 木 磐 井

◇ 佳 作 ◇

古葦の影のやわらぎ水温む
窓外の帰雁としばし歩みけり
辛夷咲く鳴子に近き無人駅
初蝶や杖の向くまま歩を進め
太杖に支えられつつ花見かな
山風も海風も吹く里の春
笑い声散らして花見客帰る

太 田 司 老
太 田 司 老
鈴 木 磐 井
園 永 泊
北 海 薫 風
小 林 春 美
北 海 薫 風



川柳 後藤閑人選

◇ 入 選 ◇

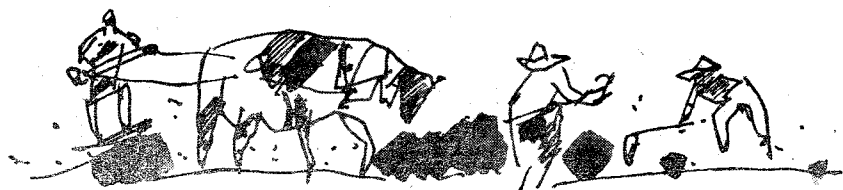
まず神に医師に感謝す無菌証
ベットより孫の就職祝う春
病む窓に春をとどけた雨の音

斎藤照雄
佐藤花紅
石川蝶一

◇ 佳 作 ◇

野良犬になつて自由に走りたし
花むしろ抱いて帰りの千鳥足
桜餅風邪を見舞いに來て呉れた
春動くみじんも嘘のない花芽
盲い手に花をそいけり総婦長
草萌えてすでに耐え抜く構え見せ
さそわれた花の匂いを白杖と

佐藤花紅
石川蝶一
北海薫風
桃生小富士
上野咲子
桜山南仙
築場市三



謝寄贈図書欄

◇五十四年一月〜三月◇

白 鳩 東京都 日本教文社
 テープライ 東京都日本点字図書館
 プラリール

園内日誌

◇一月分◇

菊池野熊本県 菊池恵楓園
 甲田の裾青森市 松丘保養園
 駒草 仙台市 駒草発行所
 陽気 天理市 養徳社
 聖愛 和歌山県 高野山出版社
 青松 香川県 大島青松園
 囲碁クラブ 東京都 日本棋院
 自然と盆栽 新生園 盆栽愛好会
 点字テープ 東京都 日本点字図書館
 大乗 京都市 大乗刊行会
 点字 東京都 多磨全生園八氏盲
 雲海 大阪府 雲海発行所
 始良 鹿兒島県 星塚敬愛園
 一味 高槻市 専精会本部
 ともしび 東京都 ともしび編集局
 棋道 東京都 日本棋院
 多磨 東京都 多磨全生園
 愛生 岡山県 長島愛生園
 高生 岡山県 栗生楽泉園
 わかば 岡山県 金光教少年少女
 会連合本部

一日 元旦。
 二日 売店大売出し。
 病棟入室者お年玉抽せん会。
 将棋大会。

◇三月分◇

八日 天理大学生七名慰問に来園。
 九日 看護学校二年生、県立名取病院見学。
 十四日 佐沼警察署員六名来園。
 二十二日 看護学校第二十七回生入学試験実施。
 二十六日 入園者地方医務局陳情、六名
 二十七日 事務長補佐研修会。(地方医務局)

一日 迫消防署新田分遣所三浦、星
 消防士によるバス立入検査のため来園。

九日 看護学校第二十五回生卒業式。

十二日 宮城県結核成人病係長佐々木
 実氏来園。

十三日 宮城県らい予防協会事務局長
 高沢健氏来園。
 国立らい療養所長会議。(本省)

二十四日 楓会代議員の定期改選。
 二十五日 代議員会正副議長互選。

楓会自警団解団式。

編集後記

今年は大阪において、らいを正しく理解する集いが催されるのであるが、長年に亘って、あらゆる角度から偏見打破運動を続けてきたにもかかわらず、いまなお偏見が根強く残っていることは誰もが認めざるを得ない事実である。偏見、この二字で書き表わせる言葉が如何に多くの者を苦しめ、哀しませ、迫害している事か、らいを病む者、そしてその家族、親戚にまで暗く重くのしかかっているのである。如何に偏見打破を論じ、声を大にして訴えたところで、国の隔離撲滅政策のために施行されたい予防法が温存されているかぎり、偏見打破などあり得ないだらうし、医療の充実、特に委託治療などあり得ないように思われてならない。私達が医療の充実、偏見打破をのぞむには、予防法の改正問題と真剣に取組み、その姿勢を明かにする時期にきてい

るように思う。

また近頃では、私達ばかりでなく、一般的に変ってしまったものの中に感謝というものがある。戦前戦後という時代は封建的。食糧難時代というが、お互が尊重し感謝の心は常にあった筈である。戦後三十数年を経て振り返って見ると、私自身たしかに感謝の心がうすれてきていることはゆがめない事実のようである。如何なる親切心も自己中心的に判断し、己れの利を基に解決しようとする傾向が強いようである。そのため感謝、または自分の非を認めての済みませんの一言が出てこないのである。お互が感謝や非を素直に認められる人間になりたいものと常に考えさせられる。本誌に掲載した和田修光氏の長い箸の中的地獄・極楽、我利我利者にはなりたくないものである。本誌に御寄稿下さった方々に厚く御礼を申し上げ、皆様の御健康をお祈りし、新生第三十一巻第二号をお届けする次第である。

(湯村記)

昭和 54 年 6 月 10 日 印刷

昭和 54 年 6 月 20 日 発行

宮城県登米郡迫町新田字上葉ノ木沢一番地

発行人 横田 篤三
編集 楓会文化部
印刷所 宮城刑務所

宮城県登米郡迫町新田局区内 電話 (022838) 2121・2122

発行所

東北新生園慰安会

昭和五十四年六月二十日
印刷
発行

東北新生園の概況

位 置	宮城県登米郡迫町新田字上葉ノ木沢 1 番地 (仙台市より北方へ60Kメートル)
敷 地	2 4 3, 3 4 8 平方メートル
建 物	2 0, 6 6 4 平方メートル
建 延 面 積	2 1, 3 1 8 平方メートル
開 園	昭和14年10月27日
病 床 定 員	5 5 7 名
現在患者数	男 2 9 0 名 女 1 6 9 名 計 4 5 9 名 (昭和52年 7 月 1 日現在)
職 員 数	1 4 1 名 (定員)
園 長	医学博士 横 田 篤 三

